

<企画者のことば>

地球人の眼で見たコロナ 19

この本は、コロナ 19 によって惹きおこされた「ニューノーマル（新常态）」にたいする 20 篇の診断書である。この診断作業に参加した著者は、20 代の大学生から 50 代の平和運動家にいたるまで、多様な世代にわたっている。発信地も韓国をはじめ、日本・中国・スペインなど各国に跨がり、内容はコールセンター労働者の生から近代文明の診断にいたるまで幅ひろい。分野も多彩で、政治をはじめ、メディア・医療・モラル・宗教・映画・哲学などを網羅している。その意味で、「コロナ 19 地球市民白書」ないしは「コロナ 19 地球人文学」と言える。したがって、この本は読者に、コロナ 19 にたいする包括的かつ深みのある情報と分析を提供すると信じる。

この本が企画された動機は、コロナ 19 を通じて韓国社会とグローバル社会をふりかえってみようということにあった。今回の事態が、私たちを認識し省察できる良い契機になると確信したからである。そうした点で、5 年前に出た『セウォル号はわたしたちに問う：災害と公共性の社会学』¹と同じような意図から出発したわけだ。しかし、その時と今とでは、状況が 180 度ちがう。セウォル号が 21 世紀韓国の最も悲劇的な事件だとすれば、コロナ 19 は正反対の最も成功した対応と評価されているからだ。その間に MERS とろうそく革命があった。MERS の時に得た失敗の教訓と、ろうそく革命のとき経験した成功の記憶が、今回のコロナ事態で光を放ったのである。このように韓国は災害と国難を経るたびに、むしろ成熟し鍛えられていった。しかし、これまでわれわれは、このような自らの経験を説明できる人文的「眼」をもてなかった。ほとんど外国からの輸入に依存してきたためである。まさにここに韓国の人文学の真空地帯が存在する。技術は独立しても、人文学は独立できていないのだ。人文学が自立できない理由は、これまでわれわれが自己の伝統にたいする徹底した「学習」と、自分自身にたいする冷徹な「省察」を怠ったからだ。ところがいま、このような怠惰は限界を見せはじめた。最近の韓国社会の経験は、もはや外的枠組みだけではわれわれ自身を説明することができないとの警鐘を送っているからである。

¹ ソウル大学校社会発展研究所編、ハンウルアカデミー、2015.10.15。

さらに重要な点は、こうした経験の中に西欧的近代を超える開關的潜在力が内蔵されているという事実である。つとに慶熙大学校のキム・サンジュン（金相俊）教授は、その兆しを東学農民革命に読み出した。東学農民軍が見せた官民相和の執綱所システムには「革命性をを超える未来性が潜在していた」と言う。今回の事態で韓国政府と韓国市民が見せた開放的かつ規律的、民主的かつ共和的といった対応方法は、西欧近代の標榜した個人主義と自由主義、功利主義と市場主義という偏向を超える新たな可能性を示したものと評価されている。それは言い換えれば、韓国の近代化の過程に、すでに「弱った近代」を超えられる「粘りづよい近代」が内蔵されていたことを意味する。その可能性を見せたのが、今回の災害に対処する創造的な対応方式であったと思う。

最後に、この本を準備するために、この一ヶ月のあいだ奔走し駆け回った企画チームと執筆者のみなさんに感謝したい。パク・ギルス（朴吉守）、イ・ウォンジン（李圓珍）、ホ・ナムジン（許南診）と筆者は、3月2日にダントクバン（注：カカオトーク団体チャットルーム）でこの本の構想を終え、翌日からすぐに執筆交渉と著述作業に入った。彼らはホン・スンジンとともに、今年創刊される『再開關』の企画メンバーでもある。アップル式に表現すれば、一種の「人文学スタジオ」だ²。*人文学スタジオは「自生的人文学をデザインしよう」との趣旨に共感する韓国の学者たちのオンライン・ワークショップ。この本は、このワークショップの最初の作品である。この小品を、いまも国民の生命と安全のためにコロナ19と闘っているすべての医療陣と疾病管理本部、政府と自治体関係者のみなさま、そして人間と万物の幸せを作り出しているすべての地球市民に捧げる。

2020年4月14日に企画者を代表してチョ・ソンファン（趙晟桓）記

² アップルの最高デザイン責任者（CDO）であったジョナサン・アイブは<Apple-Designed by Apple in California>という動画で、アップルを「小さなデザインスタジオ」（a small design studio）と紹介している。https://www.youtube.com/watch?v=CEW4D_CERkE